

## 1. 基調報告にかえて 「NANIとNAZE」

早朝。林道からアプローチし、川を渡り、樹林帯を抜け森林限界地帯へ。目指すピークを仰ぎ、ガレ場・岩場を登り詰め山頂標識へ。360度の眺望に歓喜し、そして下山開始。ここ数年来の「中高年の登山ブーム」は周知のことだが、その象徴である「富士登山」で昨今「5合目からの下山コース」の人気の高まっている。参加者からは「登り、そして下りるには体力的に・・・」ガイドは「説明しても、登りでは足元に気がとられ・・・その点下りでは気持ちにも余裕があり。視界も広くとりやすいので」とのこと。体力的に問題がなければ「登攀への挑戦～ピークでの高揚感～下山した達成感」が魅力となるが、技術・体力的判断から「下山ルートの解放感～多様な自然模様～下山後の充足感」を求めることも新鮮と言える。アクセスが整備されていれば、多様な年齢層が楽しめる「スポーツトレッキング」である。（無論、下山コースの事故多発を忘れてはならない。）

低学年	中学年	高学年
・的あてゲーム ・シュートゲーム	・ポートボール ・ミニサッカー ・タグラグビー・フラッグフットボール ・プレルボール・ソフトバレーボール ・キックベースボール	・バスケットボール ・サッカー ・ソフトボール ・ティーボール

●現行小学校指導要領・体育科「ゲーム・ボール運動領域」の内容例示を簡素化したものである。解説では「発達の段階に応じた指導内容の明確化・体系化を図った」とし、《「易しいゲーム」(中)：簡単なボール操作で行える、比較的少人数で行える、身体接触を避けるなど、児童が取り組みやすいように工夫したゲーム》《「簡素化されたゲーム」(高)ルールや形式が一般化されたゲームを児童の発達の段階を踏まえ、プレイヤーの数、コート of 広さ、プレー上の制限(緩和)ボールその他の運動用具や設備など、ゲームのルールや様式を修正し、学習課題を追及しやすいように工夫したゲーム》と明記している。しかし、一例ではあるが、中学年のポートボールで獲得した要素が高学年のバスケットにどのように発展するかとの「質の連鎖」に関わる説明が十分に掘みきれない。サッカーの指導系統において、ミニサッカーの技術・戦術を系統化に組み入れることは可能であり、検証的に実践されている。

”高みを見据えた『日本100名山・200名山完全人力踏破』と「下山コーストレッキング」をみたとき、それぞれが秘めている「質の力感」が存在するのであり、ティーボールはソフトボールにつなげるための「単なる簡素化されたゲーム」ではない。すなわち「いまナニを獲得させたいのか、それはなぜなのか」との指導目線を磨くことにある。

(札幌学院大学 大瀬隆)

## 2. 実践レポートに学ぶ

実践①

### 「ネコちゃん体操、そしてお話鉄棒」

別海町立西春別小学校 米谷豊彦

#### 1. R君登場

本校は全校児童37名、1, 2年は単式学級、3・4年と5・6年は複式学級である。私は2年生の子ども達10名の担任である。とても素直で、人懐っこい子ども達であるとともに、現在は何の学校でもそうであるように、人間関係をつくることにとても不器用である。本校の良いところは、職員室で毎日尽きることなく子ども達の話で盛り上げられるところであるが、よく話題になるのは、「う～ん、どの子がスタンダードなのかわからない。」小さい学校ゆえに、子ども達一人ひとりがとても目立つからかもしれないが、とにかくいろんな子がいるのだ。そういった子ども達を人と人として結びつけ、集団をつくっていくことが学校の役割だと考えているが。そして、そこへ・・・。

4月にR君(2年生)が転校してきた。始業式でも入学式でもじっとしていない。椅子に座ってられない。翌日から授業が始まると、立ち歩いて同級生の机の上にある鉛筆や消しゴムを投げまくり、ドヤ顔で教室から飛び出していく。あっけにとられる2年生達。

「先生！R君ひどい！」

「もうR君大変です！」

「くそ～。Rのやつ絶対に許さん！」

子ども達の不満が一気に爆発した。教室は大混乱。

1年生からの持ち上がりである2年生には、子ども達にも保護者にも『学校はトラブルを経験するところ』だから、ケンカがあっても、意地悪があってもぜんぜんおかしくない。トラブルが起こったときこそ子どもが成長するチャンス。」と事あるごとに伝えてきた。しかし2年生の子ども達からすれば、Rくんの行動はトラブルを超越しているし、この時期の子ども達に怒るなと言うほうが無理であり、担任の私でさえイライラが頂点に達している。授業を心配して、高学年の特別支援担当のN先生が毎日様子を見に来てくれた。教室から飛び出したR君を探しに行くとは他の子の授業にならないので、管理職や、事務の先生、公務補さんまでR君に対応してくれる。

#### 2. ネコちゃん体操から「お話マット」へ

4月当初に、1年生担任のM先生から、

「1年生は4人しかいないので、2年生と一緒に体育できませんか。」

と持ちかけられた。合同体育なら、1年生にとっては2年生が見本になり、運動に対するイメージがわくし、2年生にとっては、教える場面が増え、リーダー性を養うことができる。異質協同の教え合いの授業を展開することができる考えた。

いちばん最初の合体はおにごっこ。14人いるとおにごっこも少し盛り上がる。『あみなげた』では、R君と一緒に転校してきたK君の鬼を交わしながらの華麗なるステップに驚いた。この動きは、やがて陸上運動のみならず、敵を交わしながらのボール運動につながっていくだろう。

そして、マット運動の時間がやってきた。まずは2年生が「ネコちゃん体操」の見本を見せた。毎日のように見ているとあまり感じなかったが、1年生と一緒にやってみると、1年間の取り組みでかなり高度な動きに達していることがわかった。この「ネコちゃん体操」には器械運動の基本となる動きや感覚が内包されていると考えている。

マット、跳び箱、鉄棒の器械運動では必ずネコちゃん体操から授業に入る。

マット運動の授業は、『お話マット』に取り組んだ。

1年生の課題は、

**くまさんが やってきて こんにちは こんにちは さようなら ハイポーズ**

腰を高く上げ、両手にしっかり重心をのせた動物歩きから、「こんにちは」で股の間から覗き

込むように大きく首をおろ。「さようなら」で上から落ちるように前転をする。

2年生は、

**くまさんが やってきて こんにちは こんにちは さようなら ハイ側転 ハイポーズ**

1年生の動きに、側転をプラスした『お話マット』で、みんなで大きな声でお話をする。

皆楽しそうに取り組み、発表会では、R君も参加することができた。

2年生は、この1年間で、側転の完成度が上がった。最後のポーズは、自由に自分の好きなポーズをするのだが、2年生は最後に「ブリッジ」の足上げを取り入れた子が多かった。あまり時間をとることができなかつたので、『お話マット』の創作はできなかつたが、「ネコちゃん体操」からの「お話マット」は今後の器械運動の土台となると確信した。

### 3、グループ学習から「お話鉄棒」へ

今年度は、体育館の改修工事で10月以降体育館が使えないため、昨年まで2学期に取り組んでいた鉄棒の授業を6月後半から取り組んだ。

授業の『キーワード』は3つ、「こうもりふりおり」「連続技の創作」「グループ学習」である。

## お話鉄棒にチャレンジ

1、 単元名 てつぼうあそび（1・2年）

2、 単元について

（1）教材観・指導観

鉄棒あそびは、逆さまになったり、鉄棒を軸にぐるぐる回るなど、普段の生活では味わえない鉄棒独特の面白さがある。また、鉄棒につかまったり、ぶら下がったりしながら自分で技を発明したり、いろいろな技をつなぎ合わせて連続技をつくるなど表現する面白さがある。

「鉄棒＝逆上がり」、「努力」、「克服」ではなく、子ども達が1本の鉄棒を軸に自由に身体を表現し、鉄棒でしか味わうことのできないスリルや楽しさを追求することのできる教材である。鉄棒に限らず、マット運動や跳び箱運動などの器械運動は、克服的スポーツではない。「逆上がり神話」や「開脚跳び何段神話」は依然として、学校現場に残っており、1つ2つの決められた技の反復練習が子ども達の器械運動嫌いを増やしていると思っている。鉄棒の授業に取り組んでいる間に、休み時間の「鉄棒ブーム」ができなければ、その授業は失敗であると考えている。鉄棒の楽しさ、心地よさをぜひすべての子ども達に味わってほしい。

その楽しさを追求するために、低学年では「こうもりふりおり」という技を中心とした連続技作りを、グループ学習を主体として展開していくこととする。授業の『キーワード』は、「こうもりふりおり」「連続技の創作」「グループ学習」の3つである。

**こうもりふりおり** （技術の中心）

・回転せず、スイングが中心になる技なので、低学年でも比較的容易に獲得できる。

・逆さ感覚、スイング、腕支持姿勢など、鉄棒運動に必要な基礎的感覚を養うのに適している。

・ポイントがわかりやすく、教え合いが成立しやすい。

・ダイナミックな技であるため、成功した時には大きな達成感があり、連続技のフィニッシュに使える。

**連続技作り** （表現力）

・はじめはこちらで提示した短いお話に合わせて技をつなげたりしながら、持ち技を増やしていく中で、どの技とどの技をつなげたらスムーズに気持ちよく連続

技を構成していくことができるかを考える。

**グループ学習**（人とのかかわり・言語活動）

- ・グループで「こうもりふりおり」の練習をしたり、連続技をつくっていく中で、友達と教え合ったり、補助しあったりする活動場面を作る。
- ・言葉で伝え合うことや見せ合うことで、技を獲得するためのポイントを見つけることができる。
- ・1，2年生をミックスした異質グループを作り、教え合いを通して友達とのかかわり方について考える。

## （2）児童観

1，2年生は単式の学級であるが、1年生の人数が4名ということもあり、4月より1・2年の合同体育を行ってきた。1年、2年後には複式での授業が予想され、複式学級を見据えての合同学習となる。

これまで合同でおにそびやマットあそび、かけっこやリレーの学習などに取り組んできた。1年生は人数が増えたことや、見本になる2年生がいることで各運動に対してのイメージがもてること、また2年生は1年生に教えてあげたり、見本にならないといけないという意識があるのでリーダーシップをとろうとするなど、合同授業の良さが出始めている。日常的には自己中心的な子ども達が多く、トラブルになったり、学習規律という点ではまだまだだが、1年生も2年生も運動好きな子ども達が多い。

1，2年生に限らず、本校のどの学年の子ども達にも共通していえることは、「人とのかかわり方」が大変不器用ということである。教育の目的である「人格の完成」に迫り、子ども達が生涯にわたって、生きて働く学力を身につけるためには学校での教育活動を通して「人とのかかわり方」を学習していかなければならない。それには体育という教科が大変重要であると考えている。体力の向上だけが体育の学力ではなく、運動文化を楽しみながら科学的なものの見方や民主的な考え方を養っていかなければならないと思っている。競争ではなく、子ども達の共同の力を大切にして学習を進めていきたい。

今回の「てつぼうあそび」の授業をきっかけに「鉄棒ブーム」が沸き起こり、友達と鉄棒をするってこんなに楽しいんだということを経験してほしい。

### ○R君について

R君は多動傾向があり、体育だけではなく、どの授業でも他の子ども達と同じように学習に取り組むことはできない。2年生の子ども達は当初R君が転校してきた際には大変混乱していたが、徐々にR君のことを理解し始め、R君に大きな声を出してばかりでは逆効果であることに気づき、接し方も変わり始めた。R君も少しずつ周りの子ども達との関係を築けるようになってきている。

体育の中では、皆と一緒に活動することもあれば、まったく参加しないこともある。他の教科でもそうだが、授業の中で何かR君に役割を持たせることで、活動に参加するケースが増えてきているので、鉄棒の授業ではさてどうするか思案中である。

### 3， 研究主題とのかかわりについて（一部略）

#### 〔研究仮説と本授業のかかわり〕

1学期前半に取り組んだマットあそびでは、器械運動の基本となる「あふり」や「はね」等の基本的な感覚作りを内包した「ねこちゃん体操」を準備運動とし、側転を中心とする「お話マット」に取り組んだ。このマット運動の取り組みは、今回の鉄棒運動の中心となる「こうもりふりおり」や「お話鉄棒」を見据えての取り組みである。「マットあそび」で身につけた力を「てつぼうあそび」に活用（転移）する試みである。ここで付けた力は、さらに「とびばこあそび」につながっていくと考えている。

また、表現する場や学び合う場を設定するにあたって、グループ学習を取り入れる。異質のグループを作ることによって教え合い、学び合いが発生しやすく、より人との関わりが持て、自分を表現したり、友達を認める力が養われるのではないか。また単元の最後に発表会を持つことで、鉄棒運動における身体表現、言語表現のまとめとし、子ども達に達成感を持たせてやりたい。

※〔あふり〕胸部と腰部の前後動を時間差によって身体操作する技術

〔はね〕体を「く」の字に曲げて「ため」をつくり、一気に反らす身体操作

#### 4. 単元の見積

〈できる〉・・・(技能)

- ・いろいろな鉄棒の技をする中で、鉄棒に必要な基礎的運動感覚(逆さ感覚、スイング、腕支持姿勢)を身につけることにより、こうもりふりおりができる。
- ・鉄棒の発明技を作ったり、色々な技を組み合わせでお話鉄棒(連続技)を作り、発表することができる。

〈わかる〉・・・(知識・理解)

- ・こうもりの振り始めのポイントやこうもりふりおりの足を離すタイミングがわかる。

〈学び合う〉・・・(思考・判断 関心・意欲・態度)

- ・こうもりふりのポイントをグループで見出し、友達と教え合いながら学習する。
- ・グループで協力して、お話鉄棒を作る。

#### 5. 指導計画(9時間)略

※毎時間とも「ねこちゃん体操」から授業に入る。

◎ねこちゃん体操

- |   |              |             |             |           |
|---|--------------|-------------|-------------|-----------|
| 1 | ね〜こちゃんがお〜こった | フーッ!        | ハッ!         | (繰り返す)    |
| 2 | ね〜こちゃんのあく〜び、 | いち、に、さん、はい、 | にゃお〜ん、にゃお〜ん | (繰り返す)    |
| 3 | かめさんになって     | グーラン        | グーラン        | (繰り返す)    |
|   | お〜しまい        | グルリ         |             |           |
| 4 | ブーリッジ、       | いち、に、さん、し、  | あ〜しあげ、      | いち、に、さん、し |
|   | お〜しまい        |             |             |           |
| 5 | アンテナさんのようい   | ピーン、ポキ、     | もいちどピーン、ポキ  | (繰り返す)    |
|   | お〜〜〜し、       | まい、         | ビシッ!        |           |

#### 6. 本時の学習 (略)

#### お話鉄棒資料

◎授業の流れ

- |    |                   |
|----|-------------------|
| 1、 | ねこちゃん体操           |
| 2、 | 「こうもりふりおり」の練習     |
| 3、 | 新しい(まだできていない)技の練習 |
| 4、 | お話鉄棒              |
| 5、 | ふりかえり             |

◎提示した「お話てつぼう」

- |   |         |        |        |       |
|---|---------|--------|--------|-------|
| 1 | ぶたのまるやき | よっこらしょ | 火にあぶられ | あちちちち |
|   | かた手はなして | はいおちた  | ハイポーズ  |       |

2 おさるさんがやってきて りょう手はなしてこうもりさん  
 ぶ～らぶら ぶ～らぶら こんにちは こんにちは  
 さようなら ハイおりた

◎子ども達が考えた「お話てつぼう」

1班  
 おさるさんがやってきて くるりんぱ こうもりさんもやってきて  
 ぶ～らぶら ぶ～らぶら こんにちは こんにちは さよ～なら  
 いきおいつけて はいちゃくち ハイポーズ

2班  
 つばめさんがとんできて くるりんぱ おさるさんもやってきて  
 おえかきはじめて しゃしゃしゃしゃしゃ りょう手はなして こうもりさん  
 ぶ～らぶら ぶ～らぶら こんにちは こんにちは  
 さよ～なら はいおりた ハイポーズ

3班  
 ふとんほしだよ よっこらしょ ぶたのまるやき よっこらしょ  
 いかいおりて こうもりさん 1・2の3で ぶ～らぶら ぶ～らぶら  
 こんにちは こんにちは さよ～なら はいおりた ハイポーズ

◎グループでの確認

	こうもりふり	お話てつぼう
1班	ろくぼくののころを見てちゃくちする。	ことばのタイミングをやっている人に合わせる。
2班	ろくぼくののころを見てからおる。	やっている人にタイミングを合わせる。おそい人に合わせる。
3班	足に力を入れすぎない。	ぶ～らぶらのとき、スピードを合わせて、いっしょにあたまをうごかす。

◎成果と課題

今回は、グループで「こうもりふりおり」を技の中心としたお話鉄棒の創作を行った。集団演技としての「お話鉄棒」はなかなか高度な内容だったが、お話を作る過程で2年生をリーダーとしての教え合い、話し合いが成り立ってきた。グループのだれかが、できなかった技や「こうもりふりおり」を初めて成功させると、みんなが自分のことのように喜び、体育館中に歓声が響き渡り、集団としての一体感が生まれてきた。また、授業の感想を書くことによって、分析したり、課題を見つけることができるようになってほしいと考えたが、まだまだ皆が視点に沿った内容を綴るところまではいっていない。

集団での「お話鉄棒」の難しさは、きっかけとスピードである。動きをシンクロさせるためにはどうしたらいいかということを考え、言葉を使って確かめ合うことがこの授業のポイントであろう。

〔授業の主な流れ〕

- ① 授業の前に、2年生が今日の授業での「こうもりふりおり」や「お話マット」のポイントを話し合います。
- ② 授業ではまず各班のポイントを確認し合った後「こうもりふりおり」や新しい技の練習をします。
- ③ そして班で作った「お話マット」の練習。友だちとうまくシンクロすることができかな？
- ④ 授業の終わりには、体育カード「先生あのね」に今日の感想を書きます。何ができて、何ができなかったのか。2年生が1年生にアドバイスすることもあります。

## 「大規模校体育の実例」

### はじめに

本校は学年100名程度3クラス、18学級で根室管内では児童数最多の学校である。特別支援学級の増加により職員数も50名を超えてきた。

そのため、割り当てられた体育館マスでは学年合同体育を行わざるを得ない。さらには学年団の先生方には体育を不得手とする方も少なくなく、体育教科担当者にお任せ状態になることが多い。学級独自の体育はなかなか難しい状態である。(昔、児童数が多かった時はそんな状態の学校が多くあったのだが)

### 先生方への提起を

そんな状況なので、児童に教える以前に先生方へ学習方法や内容について教えていくことが大事である。毎週の学年打ち合わせは、時間割や全教科の内容や進度の打ち合わせにとられるので、体育だけの時間はそれほど多くとれない。

かといって複雑な指導案を提示しても(提示もしてないが)読む時間もない。そこでワークシートや簡単な指導内容のみ知らせ、実際の授業を通じて先生方にも理解してもらっている。幸いにして今回組んでいるのは30代と40代のベテラン女性教諭なので、何とか打ち合わせも少なく進めることができている。

実際に進めていきながら、「そうか～なるほどね!」と、先生方から共感をいただくことがしばしばである。

### 一斉指導からグループ学習への転換

昨年は1年生、今年は2年生であるため、どうしても教師主導での一斉学習(100人)が多く、マイクを使いながら指示し進めることが多くなる。しかし、それでは真の学びとはならないのである。やっぱり「やらされる体育」になり、発見も学びも教え合いも、そして楽しみまでもが減っていくようになる。かといって、わんぱくな低学年(現学年はとりわけ大変な学年なので…)に自主的な学習が成り立つか?という不安があって二の足を踏んでいた。

でも今年春から、思い切って「子どもたちに委ねてみる」ことにした。リレー学習である。(後述記載) ここでは、あれだけ言うことも聞かず遊んでいた子どもも真剣に取り組んでいる姿が見られ、担任団も驚く始末であった。

やはり、子どもを信じ、学びのプロセスや統一性、学ぶ価値あるものには、きちんとした学習が低学年でも成り立つということである。

### 記録と考察

同じように体育ノートへの記録化と、学習を振り返ったり進めていくための「考察」も低学年であろうと、必要であると感じた。話し合いだけでは「よりどころ」がないのである。話し合い考えたことを文字にしていく過程は子ども自身の学びが深まっていくことにもなる。運動量と書く時間の比較が懸念されるが、逆に多人数だと待ち時間も多いのである。場が限られる分、記録したり、話し合い・思考する活動が有効となってくる。

大規模合同体育こそ、必要なのだと思う。

### 発信すること

自分自身は、ずーっと同じように指導してきていることが、いつしか自分の中では旧知の内容と決めつけることがある。「こんなこと、他の先生も当然知っているだろう。」と思うのである。でも、知らない先生が多いことにも、年齢を感じる。以前は学習会などで発信していたが、最近では国語算数以外の研究は稀なのである。だから、ドル平や側転、ネコちゃん体操…な

ど、聞いたことがない人ばかりである。

見るか見ないかは考えず、職員室にも発信することにした。時にはまとめたレポートや指導系統、時には近隣学年の先生に「こういうのあるよ～いいよ～資料もあるよ～」などと広めるのである。そのことにより、学年間の系統的な指導ができ、最終的に子どもたちに力がつくことになるのである。

もう一つは、校長に見てもらうこと。そこから他の先生にも広がることも多い。諦めずに、発信を続けることが、はじめの一步となることにも繋がっていく。

## 子どもの進歩を発信する

毎日とはいかないが、週に2、3枚の学級通信に「今、体育ではこんな授業をしています。大事なのは・・・。〇〇ちゃんは、最初できなかったのに、こんなにできるようになってきました。」などを書くことが多い。これも意識して発信している。父母の体育教科に対する意識づけと、通信を読んだ父母から子どもへの言葉が結構効いてくるのである。要は、やる気になる子が多くなる。と、授業が活気にあふれてくる。それを繋げて年に一度は体育の参観授業を行うのである。(たいていはマット)でも、体育的な行事では運動会、マラソン、スケートがあるので、意識としては親も運動好きにさせたいと思っているのである。

## 体育ノートから 略

■昨年度のリレー提案を実践した例である

## 2年生リレー大作戦 ～授業実践報告～

5月に、かけっこと一緒に「リレー大作戦」という学習を2年生全部で取り組みました。実際には運動会ではリレーはしませんが、3年生からのリレーに生かされるでしょうし、系統的な指導という面で取り組みました。校長先生が見にいらして、「他学年にも報告したらいいですよ。」ということでしたので、つたないながらもご報告します。

◆今回の一番の工夫は「自分たちでタイムをとり、自分たちで記録し、タイムを縮める」ことです。なんと、いつも遊んでいる自由人たちが、真剣に取り組み始めたのでびっくり！そしてタイムもどんどん良くなっていきました。ストップウォッチの人気もすごい！

グループ人数は違っていても、何秒縮めるかで学習を組む。

◆グループは各学級男女各2列のグループで、全体では12チームになりました。

低学年なので並び順でグルーピングしましたが、学年が進むと生活班や平均化したチームが良いでしょう。(目標は変わります。)

学習のめあて

○タイムが良くなるような作戦を考えよう。

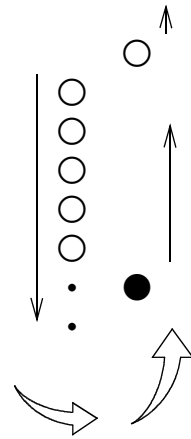
- 1 はじめは、折り返しリレー  
体育館で行ったのですれ違いタッチでのリレーをしました。  
でも、これでは向かい合いリレーになるので系統性がありません。
- 2 バトンは小さな輪(プールに持って行くリング)





を初めて使いました。

- 3 いよいよ、後ろから走ってきてバトンをもらうリレーへ。  
スタートは真ん中ぐらいにし、ステージの所まで走り、折り返してきて後ろの壁まで走り、次走者にバトンタッチします。普通のリレーのような形となります。いよいよ作戦を考える段階となります。



- 4 最初の作戦は渡し方を考えさせる。  
あくまでも、「考えさせます」すぐに教え込むのではなく自分たちで考えさせることが大切です。その中で「わかった」ことは 後々まで「力（学力）」となります。

- 今回もグループで考え、発表の中から出てきました。  
「違う手で渡したら良い」→（なぜ？）→「ぶつかるから」（スバラシイ！）

### ◎大作戦その1 「左手で渡し、右手でもらう」

- 5 テイクオーバーゾーンを設定する  
今までは、決まった線（スタート線）を律儀に守ってバトンタッチしていましたが、マーカーでゾーンを作って、その中でならどこでもいいのでバトンタッチして良いことにします。誰はどこで待つ（もらう）かを決めさせた。
- 速い子はゾーンの後方で待つチームがほとんど。他の子は今まで通りのところが多かった。（なぜ後ろでまつの？）→「たくさん走るから（距離のこと）」（スバラシイ！）  
\*（速い子は後ろで待つとたくさん走ってもらえるね。では、速くない人はどこで待てばいいかな？）→「前の方」ということがわかりました。その方が、速い人に長く走ってもらえてタイムがよくなるんですね。

### ◎大作戦その2 「速い子は後ろで待つ。前の人より遅い子は前で待つ。」

- 6 走る順番を考えさせる。  
並び順でリレーしていたのを、自分たちの作戦で順番を決めさせました。  
自由に考えさせると、だいたいは最後に速い子たちを置くチームが多かったですが、ここでもちゃんと考えるチームが出てきました。
- 「速い遅い速い遅いにする」→（なぜ？）→「カバーできる」→（どんな？）→「???'」（これでもスバラシイ！）  
あとは、教師が補足しました。作戦その2が活かされるからです。

### ◎大作戦その3 「走る順は、速い遅い速い遅いの繰り返しにする。」

- 7 より速くなるために、バトンの渡し方を考えさせる。  
ゾーンでの渡し方をより深く考えさせ、練習させた。その中で走りながらバトンを受け渡すところを発見。すぐ全体に見せた。（スバラシイ！）

（止まってもらうのと、どっちが速い？）→「走りながらが絶対速い」  
では、走りながらバトンをもらおう！

## ◎大作戦その4 「走りながらバトンをもらおう。」

\*本来は、だらだら走りでの受け渡しは無意味である。目指すはトップスピードでの受け渡しをねらいとしたいが、2年生ではこの程度とした。学年が進むにつれダッシュしてもらってタイミングを掴ませたい。それには緻密な学習が必要でもあるが…。

(運動会用に裏技…前後にもよるが「1. 5m～2m前で次走者はダッシュ」これでもかなりタイムはあがる。)

### さいごに

過去にもリレー学習には何度も取り組んできたが、2年生では初めてである。リレーではグループ学習ができ、学級づくりにつながる点と、結果として一人一人の走力も向上してくる。何より、子供たちの意欲は半端ない。運動会前には是非とも取り組んでは?と、思ってきた。運動会用のやつつけリレー練習は、できない子にとっては苦痛しかない。誰もがわかるようなリレーになると変わってくると思っているし、真の学力となり得るとおもう。さて、今年のリレーはどうなるであろう・・・。

## 15年度の報告終わるにあたり

今までは少人数校に居たので、授業もやりやすく、成果もすぐ見られた。それが、多人数合同体育の中で、今までと同じように行うことが本当に難しいのである。「自分のクラスだけで行いたい」と何度思ったことか。それが、いつしか「教師による一斉指導体育」へとつながるのである。そして、そのほうが楽でもあるので、流されてしまいがちになる。

それを、計画を立て、先生方への資料を作り、体育ノートを作り子どもたちの自主的な授業形態へと変えていくのは、かなりの大変さがある。なので、本校には体育専門教師がかなり存在するにも関わらず、体育の授業はお粗末な現状である。(研究推進指定校であるが所以?)

でも、子どもにとっては、学校規模が違うからという理由ではなく、きちんとした体育授業を受け確かな学力をつけていくことこそが平等な権利であろう。残り少ない現職であるが、何とか踏ん張っていこうと思う。

## 3. まとめと課題

実践①では、器械運動の系統を重視し、体幹基礎とも言える「ねこちゃん体操」を低学年から実施し、その効果や発展をを検証した例である。全国的にはねこちゃん体操が普及してかなりになるが、北海道ではまだまだ知られていない。また、そこからマットや鉄棒、跳び箱にどう生かしていけば良いかの実践も多くない。米谷氏は学校ぐるみの系統的な指導を行い、上学年から下学年に子どもたちが教え・伝えていくまでに成長している。教師主導ではなく児童のなかに文化として根付いていることが素晴らしいと言える。今後はそのノウハウを広めていくことが望まれる。

実践②では大規模校の悩みが出されているが、たとえ一斉体育でも、考えさせることにより子どもが変わってくるし、低学年でもできるという例である。ただ、そこには指導者の指針や発想を引き出すポイントが必要となってくる。基調報告にも語られているが、その学習で「何を重視し何を学ばせたいのか」を、運動の特質や系統を基に考えていくことが大切である。

今年度も参加者やレポート数が少なく、何等かの手立てが必要となってきた。芸体教科が軽んじられる方向もあり、かたや体力・運動能力の低下(体力テスト)が報じられる中で、真の運動能力や体力向上はどうあるべきかも、議論していかななくてはならないであろう。